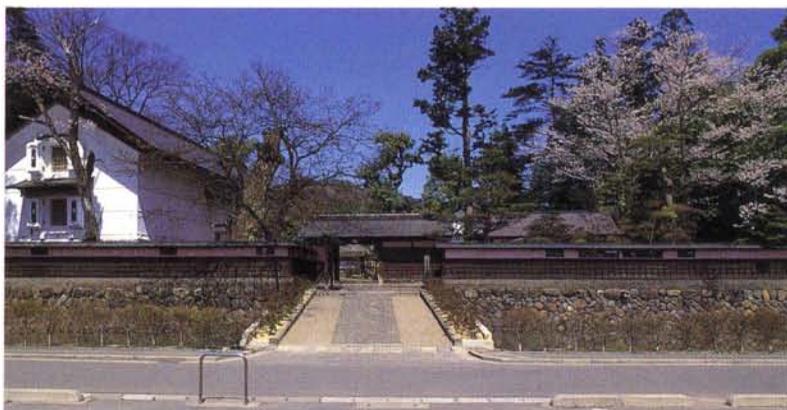
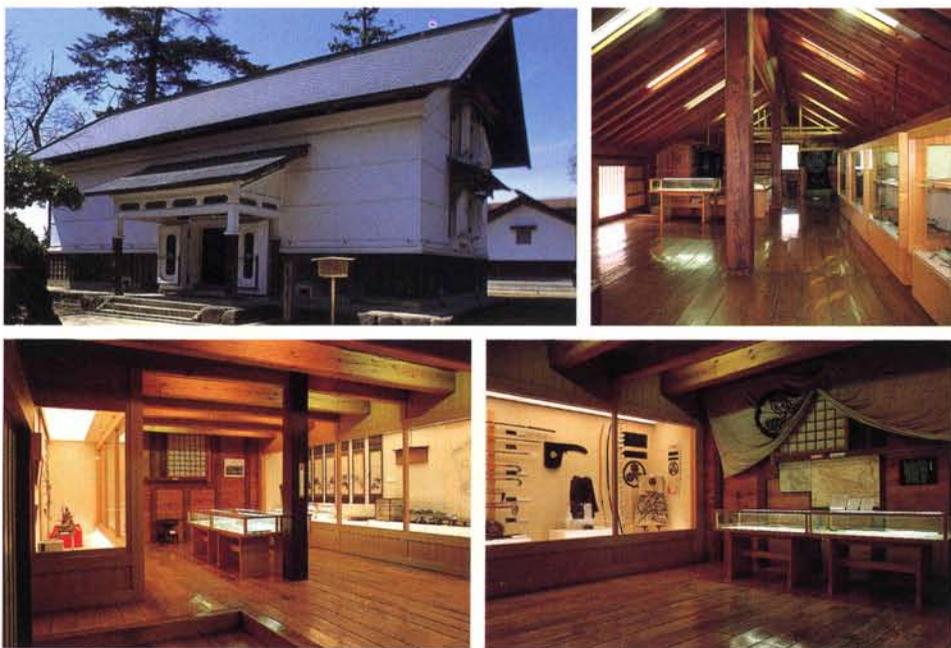


《旧堀米邸》



長屋門

江戸末期に建てられたもので、格子片番所付長屋門である。塀の上壁は、京より求めた紅殻べにがらを加え加工したもので、復元するときも同じ工法でつくられた。当時は、名主と武士待遇を受けている者だけが、長屋門をもちいることができた。



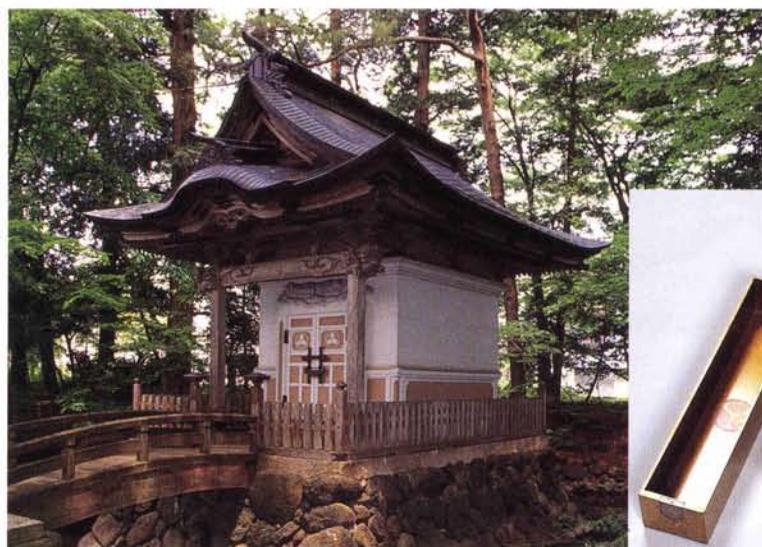
武者蔵（農兵隊武器庫）

嘉永6年（1853）に建てられたもので、文久3年（1863）から慶応4年（1868）にかけては、幕府の命によって組織された農兵隊の武器蔵として活用された。



座敷蔵

江戸中期頃の掘建式の蔵で、6棟あった土蔵の一番蔵と呼ばれていた。町内で最も古い蔵の一つであり、後世に座敷蔵に改造し、客室として利用されていた。床の間の蹴込みには彫刻がほどこされ、柱は面皮柱を用い、襖絵は絹斎（安政元年・1854）の作である。



御朱印蔵

御朱印蔵とは朱印状の収蔵庫で、近郷吉川村の新山神社から譲り受けた御朱印状を納めるために、6代目堀米四郎兵衛則勝が願主となって、文久3年（1863）に建立したものである。唐破風向拝付入母屋造の土蔵で、棟梁は松田仁作、設計および正面の彫刻は細谷藤吉、木鼻の獅子は高山文五郎の作、ともに郷土の生んだ名匠である。



工房くれない

町内に残る蔵を移転復元したもので紅花染・こけし絵付け・わら細工などの体験学習の場として利用されている。



沢畑こぶ石

通称「沢畑のこぶ石」と呼ばれている石は、推定310万年から200万年以前、出羽丘陵の葉山が大爆発した際生じた火砕岩である。苔が生え易く古色を持ち風情あるため、京阪地方では「出羽のこぶ石」と呼ばれ珍重された。町内では、現在も庭灯籠の笠石や、火袋、また手水鉢等の石材として利用されている。

紅花の句碑

細谷鳩舎（河北町）の句で「紅花に紅しみ来て人を待つ」と刻まれている。紅花の摘み時は「三片紅」といって黄色い花に3～4枚の紅をにじませた頃である。ちょうど摘み時を迎えた紅花が若やいだ姿で人を待つというのである。





青銅水盤（白石城主からの拝領品）



明朝螺鈿高台（白石城主からの拝領品）

堀米家では大名貸しもやっていた。大名は財政が不如意になって豪商から借金し、返済に苦しむと、貴重な家宝を借金の抵当にもってきたという。それらの品を拝領品と呼んでいる。



御膳類

堀米家には、代官や巡見役の出入りがあり、こうした客人の接待に使われた。御膳には、四季折々の絵をほどこした蠅帳をかけていた。



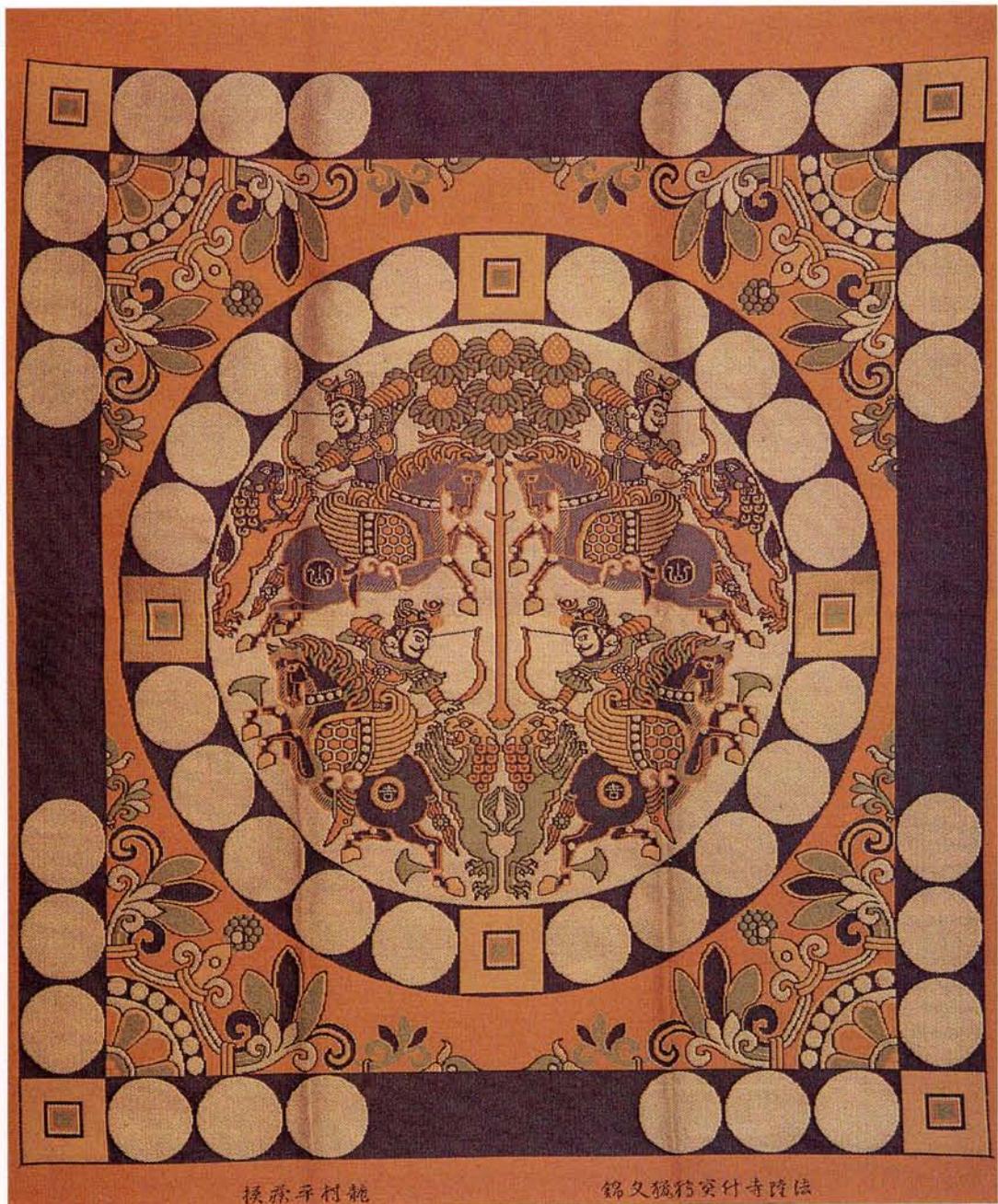
さわばとう
沢畑刀

6代目四郎兵衛は、伊達生まれの刀工守国を白石から招いて、自宅裏屋敷に鍛冶場を設けて多くの刀を造っている。「羽州谷地住藤原勝光」と銘を切っているのがこの時のもので、慶応年間の刻銘が最も多く見られる。



さわばたやき
沢畑焼

明治5年、6代目四郎兵衛が法師森にのぼり窯を築き、その地の土を用いて陶土とし、仙台堤焼の職人5名を招いて日用品を製作して「沢畑焼」と呼んだ。製造の期間は10年間ぐらいで、釉薬の不具合から窯は閉められたが、その窯跡は今も残っている。



榎森平村純

銘久猿狩宮什寺隆法

ししかりもんざん
獅子狩文錦（法隆寺）複製

7世紀の初頭、聖徳太子の命により遣隋使として中国に渡った小野妹子が、隋の煬帝ようだいより贈られたとされる錦で、法隆寺夢殿に長い間秘められていた。その錦を復元するために、織物研究家の龍村平蔵氏が、長い歳月をかけて織り上げたものである。中に紅染も見られる。